

[学園研 B]

研究課題名: 格差社会ベトナムの公立小・中学校における英語教育ならびに教員養成の現状と
その課題を探る——公教育は私塾(英語学校)にどのように依存しているか

国際コミュニケーション学部 教授 八田 玄 二

私は、2006年3月、2007年9月の二度にわたりベトナムのハノイ郊外のバクジャン省を訪問した。最初の訪問では、ベトナム国教育訓練省(日本の文部科学省に相当)の初等教育局長、バクジャン省の教育訓練局(日本の教育委員会に相当)の英語教育関係者、ならびに同省の小・中の英語教師とのインタビュー調査を行い、2007年の訪問では、バクジャン省の小学校と中学校の英語の授業を参観し、その様子をビデオに撮影してきた。帰国後、学会発表と著書を通して、主として、英語教科書の分析を中心に、ベトナムでの調査の報告を行ってきた。(『小学生に英語を教えるとは?アジアと日本の教育現場から』2008、めこん:中部地区英語教育学会紀要36号 2008)

今回の研究調査(平成20年11月1日から11月6日まで)では、「格差」が社会の隅々にまで“巣くって”いるベトナムにおいて、私塾がいかに公教育の欠陥を補っているかというベトナム特有の問題にも着目し、ブリティッシュ・カウンシル(英国政府文化振興会)がハノイとホーチミン市で経営する英語学校ならびに国営の「チルドレンズ・パレス」という子どもたちが学校の授業後に通う「塾」を訪問した。ベトナムの教育制度・行政、教科書の分析、授業参観というこれまでの研究成果に加えて、今回の調査を実施することにより、「英語教育と格差」というベトナム的な問題をより包括的に把握することができた。

2007年度の TOEFL-iBT(Internet-based)のスコアの国際比較によると、ベトナムは、総計が70点(120点満点)で、アジア 36カ国の内、18位にある。片や、日本は、65点で36か国中、35位で、日本と同位にあるのは、カンボジアのみである。ベトナムのこの好成績は、しかしながら、格差の上に築かれた、ほんの一握りの恵まれた受験者の成果といっても過言ではない。(TOEFL 公式ホームページ2008年5月20日)

シンガポールの RELC (Regional Language Centre)の上級研究員の Ho 氏は、現代のベトナムの英語教育の抱える課題を総括して、格差、クラス・サイズ、教師のリクルート、教材・教具の不足などを挙げ、このような問題が解決されない限り、英語教育の質的な改善は不可能であろうと断言している。(English Language Teaching in East Asia Today, 2004. Ho Wah Kam 著、Marshall Cavendish International)

旅程は以下の通りであった。

11月1日(土) 中部国際空港出発、ホーチミン着

11月2日(日) ブリティッシュ・カウンシル・ホーチミン・オフィス訪問・授業参観

11月3日(月) JICAハノイ訪問・研究協力者 ハノイ外国語大学教授 Ha Cam Tam 氏との面談

11月4日(火) ハノイ市内公立小学校2校訪問(授業参観・ビデオ撮影・教師との面談)

ブリティッシュ・カウンシル・ハノイ・オフィス訪問・主任教師オリバー・スチール氏との面談・授業参観

11月5日(水) Children's Palace 訪問後、ハノイ発、日本帰着